Architectural Institute of Japan

【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集　第537号，311-318，2000年11月
J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 537, 311-318, Nov., 2000

# 終戦直後の広島における暁設計事務所の活動について
## —戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究—

# THE ACTIVITIES OF ARCHITECT'S OFFICE OF AKATUKI DURING THE PERIOD IMMEDIATELY AFTER THE WORLD WAR TWO IN HIROSHIMA
## —Studies on activities of architects and their roles in Hiroshima before and after the second world war—

李　　明*，石丸紀興**
*Li MING and Norioki ISHIMARU*

In this paper, some studies are done on the activities of architect's office of Akatsuki, the first architecture office in Hiroshima after the war, and the roles in the reconstruction of Hiroshima city. with observing the experiences of the architects, in the establishment and development of the office mainly.

As a result, architect's office of Akatsuki was the pioneer of Hiroshima architects, where Mr. T. Murata, Mr. Y. Kouchi and Mr. S. Ohhata were main members. Although it did not influence the main development of the modern architecture history of Japan remarkably, it indeed played a very important role in the formation and organization of the architecture offices in Hiroshima, and also in the revitalization of Hiroshima.

**Keywords:** period immediately, Hiroshima, architect's office of AKATUKI, Tadashi MURATA, Yoshinari KOUCHI, shoji OHHATA
終戦直後、広島、暁設計事務所、村田正、河内義就、大旗正二、

### 1、はじめに

本研究は、戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究の一環としても進めており、本稿では、被爆によって焼け野原になった広島を背景に、初の設計事務所として誕生したと言われる暁設計事務所を取り上げ、その設立経緯、変遷と主要建築家の経歴及びその活動を明らかにする作業を通じて、広島の復興過程における地元建築事務所の活動とその果たした役割について論じるものである。

終戦直後、被爆によって焼け野原になった広島の復興建設において、丹下健三とその広島市立児童図書館（昭和 27 年 11 月竣工)、広島ピースセンター慰霊碑・陳列館（昭和 30 年竣工)、村野藤吾とその広島世界平和記念聖堂（昭和 29 年 8 月竣工）といった建築家とその作品が比較的に大きな役割を果たしたことはよく知られている。しかし、広島の地元建築事務所の活動についてはこれまでまったくといっていいほど取り上げられなかった存在であり、ほとんど知られていない。今回、終戦直後広島の建築事務所についての調査を行い、暁設計事務所[1]という広島で本格的な建築事務所が昭和 21 年に設立され、村田正、河内義就、大旗正二という広島建築界のルーツとされている建築家が在籍し[2]、福屋デパートの焼けビルを拠点に膨大な作業をこなし、広島の復興において積極的な活動を行ったこと等が明らかになった。暁設計事務所は、戦後広島における建築設計事務所の設立とあり方との関連から興味深いものであるだけでなく、日本の戦災復興における地方の建築家の活動とその果たした役割を考える上でも重要であると思われる。また、このような地方における建築事務所、又は建築家の活動に関する研究の進展によって日本近代建築史を総体としてより的確に把握する事が可能になると考えられる。なお、地方における建築活動に関する既往の研究としては、西澤泰彦や、角幸博、上田恭嗣、石田潤一郎、川島智生の研究と拙稿[3]等がある。

研究の方法としては、村田正、河内義就、大旗正二の本人や遺族に連絡を取り、訪ねるなどヒアリングによる取材を中心に、他当時の関連記事などの文献と調査を通じて補完した[4]。

### 2、暁設計事務所の設立と変遷[5]

暁設計事務所（以下、暁設計と略す場合ある）の創設者村田正[6]の残した資料[7]によると、暁設計事務所は、昭和 20 年 10 月から昭和 21 年 3 月までの設立準備を経て昭和 21 年 4 月正式に建築設計事務所として誕生したとなっている。

ここで、暁設計が昭和 21 年に設立したことを証明する幾つかの根拠について検討してみよう。先ず、暁設計の代表的な建築家であっ

* 広島大学大学院工学研究科　博士課程後期・工修　Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hiroshima University, M. Eng.
** 広島大学工学部建築計画学　教授・工博　Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hiroshima University, Dr. Eng.



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

た河内義就[8]は「…父の縁で、村田正氏が暁設計を開設していることを知り、そこを訪ねて、21 年 10 月から働くこととなったわけです。」と暁設計に入る時の状況について述べている[9]。次に、当時暁設計のスタッフであった松永豊司[10]と沖清人[11]の証言によると二人とも昭和 21 年 4 月から暁設計事務所で仕事を手掛けるようになったという[12]。そして、錦織亮雄[13]は「…昭和 21 年春頃から村田正と柴田実（暁部隊建技大尉）等が開いていた暁設計…」と述べている[14]。これらによると、暁設計事務所が昭和 21 年に存在したことが大体判明できるが、その他明確な証拠となる資料として、戦後の広島で出版されたユニークな雑誌に「中国文化」がある。これは、中国文化連盟（当時は聯盟と記した）が物資の乏しい昭和 21 年の 3 月に機関紙として創刊したもので、文芸を通して新しい文化を築こうとしたものである。この「中国文化」の 7 月号に、当時広島市復興局の長島敏局長が、「或日の復興相談三題」という一文を寄せている。長文であるが、貴重な記録なので、その一部をそのまま引用しよう。

《今日は嬉しい話しが続いた。午前中にＡ建築工業所設計部長Ｍ氏と言う青年建築家が来訪した。来訪の目的は或る欲楽街の復興計画についての相談もあったが、それよりも、重要なことは、上智大学総長のフゴ・ラサール師からの伝言であった。Ｍ氏によって済まされた其の伝言の要旨は、「アメリカでは、第二次世界大戦終結の遠因となった原子爆弾の最初の攻撃を受けた広島市に対する関心が非常に高まっており、広島市に何などかの宗教を中心とした記念施設を残すための浄財が寄せられている由である。いずれラサール師が近近市に来訪して詳しい相談をせられることと思うが、市としてもこの記念施設の位置について考えて置いて頂きたい」と言うのである。同じ目的で市と、市内宗教団体を中心とした方面で供養会（仮称）と言う様なものを組織し広く浄財を募集して、今年の八月六日頃には仮の記念施設を完成し、当日は各宗教連合で祭典を挙行したいという計画も進められている矢先なので恩寵を超えたアメリカからのそうした贈物は、其の計画をより強力に推進することと思う、一日も早くラサール師にお会いしたい。》

今回、調査を行い、この文章に「ある A 建築工業所設計部」とは、暁設計事務所のことで、「M 氏」とは村田正であったことが明らかになった[15]。村田は、織町教会の司祭館の設計を依頼され、ラサール神父[16]とも度々言葉を交わす機会があった。設計の細かい内容については、グロッパー修道士と折衝するため上智大学にでかけており、そこでもラサール神父と会い、記念聖堂建設の決意を聞いた[17]。そこで、村田は、長島局長に記念聖堂建設の計画を伝える役割を担うことになったのである。この文章は昭和 21 年 7 月以前、多分 5 月頃に書かれたものであり、その頃には暁設計事務所が確実に存在したことを証明する一方、暁設計の積極的な活動をも物語る。

以上によると、暁設計は昭和 21 年には存在したことが確認できるだろう。暁設計事務所は、広島市立広島工業学校建築科を卒業し、広島県土木部営繕課現場監督員を経て、東京の渡辺仁建築事務所で建築設計の仕事に従事し、また東洋工業株式会社で建築設計の仕事に従事していた村田正が広島において柴田実[18]とともに昭和 21 年 4 月に設立したとする聞き取りも間違いではあるまい。そして中村順平の弟子の一人であり、日本分離派建築会の代表の一人であった山田守の元で仕事をし、満州国郵政総局に出向かしていた河内義就は、郵政省への帰還を返上して焼け野原広島での新しいまちづくりに参加することを選択し、昭和 21 年 10 月に暁設計事務所に参加した[19]。そして、同じ中村順平の弟子であり、河内義就より一年先輩であった大旗正二も満鉄から、終戦後ソ連に拘留されて昭和 23 年の夏に帰国し、広島の暁設計に参加した[20]。以上のように暁設計は、主に村田正、河内義就、大旗正二、三人の建築家を中心に、柴田実らを含めて 10 人程度のグループ[21]として構成された。昭和 59 年 4 月 27 日号の日刊中国建設新聞にて河内義就は「昭和 21 年の時点では、独立設計事務所としては、暁設計が唯一のものでした。」として暁設計は広島において最初の建築事務所であったことを語っている。

表 1　広島建築家クラブ沿革概要

| 年　表 | 出　来　事 |
|---|---|
| 昭和 23 年 8 月 1 日 | 1）広島建築家クラブ設立。2）事務局は広島市八丁堀 115 旧福屋、小田設計事務所内に設置。3）初代会長は小田能清。4）会員 6 事務所は、小田設計事務所（小田能清）、暁設計事務所（村田正）、杉田三郎経理事務所（杉田三郎）、ワイ建築設計事務所（岡村豊）、ARB 建築設計事務所（佐崎良之一）、片田建築設計事務所（片田忠雄）。 |
| 昭和 25 年 | 事務局は広島市基町繊維ビル［小田設計事務所内］に移転。 |
| 昭和 27 年 2 月 17 日 | 広島県建築設計監理協会に名称変更。 |
| 昭和 34 年 | 二代目会長に二村四郎が当選。 |
| 昭和 38 年 | 三代目会長に河内義就が当選。 |
| 昭和 42 年 1 月 14 日 | 1）四代目会長に杉田三郎が当選。2）事務局は広島市中区上八丁堀７－５［杉田三郎建築事務所内］に移転。 |
| 昭和 43 年 | 事務局は広島市中区鉄砲町５－１７［広島建築士会内］。 |
| 昭和 43 年 5 月 6 日 | 広島県建築設計事務所協会に名称変更。 |
| 昭和 43 年 12 月 7 日 | 事務局移転、広島市中区大手町４丁目２－２５。 |
| 昭和 46 年 5 月 18 日 | 五代目会長藤田隆志［K 構造研究所］当選。 |
| 昭和 47 年 7 月 1 日 | 全国建築士事務所協会連合会へ加入。 |
| 昭和 48 年 8 月 28 日 | 事務局移転広島市中区舟入幸町１９－１０［青盛ビル内］ |
| 昭和 50 年 5 月 1 日 | 連合会法人化。 |
| 昭和 50 年 5 月 20 日 | 六代目会長に小川省三［中電技術コンサルタント］ |
| 昭和 52 年 9 月 3 日 | 法人化、名称は社団法人広島県建築設計事務所協会。 |
| 昭和 53 年 5 月 19 日 | 七代目会長に河内義就［(有) 河内義就設計事務所］ |
| 昭和 55 年 4 月 7 日 | 連合会名称変更、社団法人日本建築士事務所協会連合会。 |
| 昭和 57 年 5 月 27 日 | 1）社団法人広島建築士事務所協会と名称変更。2）八代目会長に小川省三［中電技術コンサルタント］当選。 |
| 昭和 59 年 4 月 1 日 | 社団法人営繕協会中国地区事務局を併設。 |
| 昭和 60 年 1 月 10 日 | 広島県建築士事務所政経研究会事務局併設。 |
| 昭和 61 年 5 月 23 日 | 九代目会長に湯浅泰行［しんや建築事務所］当選。 |
| 昭和 62 年 5 月 29 日 | 法人設立１０周年記念大会。 |
| 平成 4 年 5 月 26 日 | 十代目会長加藤貢［KA-MI 建築設計事務所］当選。 |
| 平成 5 年 1 月 15 日 | 事務局移転、広島市中区八丁堀１－１７［大本ビル４階］。 |
| 平成 8 年 5 月 30 日 | 十一代目会長杉田輝正［(株) 杉田三郎建築設計事務所］。 |
| 平成 9 年 5 月 30 日 | 法人設立２０周年記念大会。 |

注：表 1 は広島県建築事務所協会から提供された資料を基に、1987 年の村田正氏、河内義就氏、大旗正二氏など 7 人の座談会記録などを参照として、筆者が作成した。

昭和 23 年 8 月 1 日には、広島建築家クラブが設立され、その構成会員が 6 事務所であることが明らかとなっている[22]（表 1）。この 6 事務所が広島設計界のルーツとされ、後の広島建築士事務所協会として広島の建築事業に大きな役割を果たしたのである。その時、広島建築家クラブ会員の登録には暁設計の代表として村田正が登録されている。建築家クラブは、その後に昭和 41 年には 35 事務所に増大している（表 2）。以上のように暁設計事務所は終戦直後の広島において初の建築事務所として誕生し、それに続く建築事務所設立の原点になった。暁設計事務所は当初、福屋デパートの被災して内部が焼失したビルを少し手を入れて拠点[23]にし、その後、暁設計が設計した最初の鉄筋コンクリート造の農協ビルに移転する[24]。その間福屋から出て事務所を一時市民病院東南隅の建設現場の飯場に臨時事務所としてバラック家屋を建て入居していたが、台風によって倒れ、設計図面等が全部濡れてしまったことがあったという[25]。その時、暁設計を支えてくれたと言われる広島県信用農業協同組合連合会の桑田哲夫会長によって農協ビルに入るよう誘われ、それに従うことになった。このように、暁設計事務所は、多くの人々を育て、おのおの独立し、昭和 26 年には河内義就が独立して河内義就設計事務所を設立、昭和 29 年には残された村田と大旗が暁設計から抜けて村田・大旗連合設計事務所を開設、暁設計はしばらく存続していたが、やがて不景気の中で姿を隠すように削減した[26]。そして昭和 41 年には村田相互設計事務所と大旗連合設計事務所に分かれた。暁の名称も消え、村田相互、大旗連合、河内義就設計事務所が並べ



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

たち、それもさらに近代設計コンサルタント、高田設計に分裂し、広島の建築事務所組織の層の厚さを形成した。以上により、暁設計事務所の設立と変遷についてまとめると表3のようになる。

**表2　昭和21年～昭和41年広島の建築設計事務所のリスト**

| 設立年月 | 事務所の名称 | 事務所代表 |
|---|---|---|
| 昭和21年 | 暁設計事務所 | 村田正 |
| 昭和23年 | 杉田三郎設計事務所 | 杉田三郎 |
| 昭和23年 | 小田設計事務所 | 小田能清 |
| 昭和23年 | ワイ設計事務所 | 岡村豊 |
| 昭和23年 | ARB建築設計事務所 | 佐崎良之一 |
| 昭和23年 | 片田建築設計事務所 | 片田忠雄 |
| 昭和24年 | 木村設計事務所 | 木村俊雄 |
| 昭和24年 | 長谷川設計事務所 | 長谷川 |
| 昭和25年 | 白土建築設計事務所 | 柴田斉男 |
| 昭和26年 | 河内義就設計事務所 | 河内義就 |
| 昭和27年 | あららぎ建築社 | 吉田太郎 |
| 昭和28年 | 二村建築設計事務所 | 二村四郎 |
| 昭和29年 | 村田・大旗連合設計事務所 | 村田正 |
| 昭和30年 | 久保一級建築士事務所 | 久保基也 |
| 昭和32年 | 森建築設計事務所 | 森松義 |
| 昭和33年 | K構造研究所 | 藤田隆志 |
| 昭和34年 | 坂本建築設計事務所 | 坂本正輝 |
| 昭和35年 | 梶本建築設計事務所 | 梶本忠司 |
| 昭和36年 | 茜建築設計事務所 | 和田保 |
| 昭和36年 | 高田建築設計事務所 | 高田輝広 |
| 昭和38年 | しんや建築設計事務所 | 湯浅泰行 |
| 昭和38年 | 創設計コンサルタント | 不詳 |
| 昭和38年 | 厳建築設計事務所 | 不詳 |
| 昭和39年 | KA・MI建築設計事務所 | 加藤貢 |
| 昭和39年 | 教育施設研究所広島営業所 | 吉竹寛 |
| 昭和39年 | 全建社・都市環境・建築設計事務所 | 和田保 |
| 昭和40年 | IEC建築研究所 | 片山守之 |
| 昭和40年 | 中電技術コンサルタント | 小川省三 |
| 昭和40年 | 桑原建築設計事務所 | 桑原幹雄 |
| 昭和40年 | 島津設計事務所 | 不詳 |
| 昭和41年 | 村田相互設計事務所 | 村田正 |
| 昭和41年 | 大旗連合設計事務所 | 大旗正二 |
| 昭和41年 | 都市建築研究所 | 錦織亮雄 |
| 昭和41年 | 山田保建築設計事務所 | 山田保 |
| 昭和41年 | 小林設計事務所 | 小林茂利 |

注：表2は広島県建築事務所協会、広島県建築士協会から提供された資料を基に筆者が作成した。

**表3　暁設計事務所の設立と変遷関連年表**

| 年　月 | 出　来　事 |
|---|---|
| 昭和21年4月 | 暁設計事務所設立し、事務所を福屋デパートの焼けビルの5階に置く。代表者は村田正であった。 |
| 昭和21年10月 | 建築家河内義就が暁設計事務所に参加する。当時、村田正、岡村豊、柴田実、河内義就、秋山(不詳)、松永豊司、沖清人、後福田邦彦、他2,3名といったグループであった。 |
| 昭和23年6月 | 広島平和記念カトリック聖堂コンクールに河内義就案入賞。 |
| 昭和23年10月 | 建築家大旗正二が暁設計事務所に参加。事務所の柴田実が福知山市役所建設課長に転出。 |
| 昭和24年8月 | 広島平和記念公園コンペに河内義就案入賞。 |
| 昭和25年頃 | 東洋座の大火があり、隣接の福屋5階の事務所も危険になったが資料は助かった。同年福屋が香川に買い取られ、内容を整備し、デパートとしてオープンすることとなり、立ち退くこととなり、事務所を市民病院東南隅の建設現場事務所のバラックで設計業務を行う。 |
| 昭和25年9月 | ジェーン台風に吹き飛ばされバラック事務所が倒壊する。 |
| 昭和26年 | 暁設計を支えてくれた広島県信用農業協同組合連合会の桑田哲夫会長の厚意により事務所の拠点を農協ビルに移す。 |
| 昭和26年2月 | 河内義就独立して河内義就設計事務所設立。 |
| 昭和29年 | 村田・大旗建築事務所を設立し、その後の暁設計事務所の去就は不詳。大旗によると暁設計はしばらく存在したという。 |
| 昭和36年 | 高田輝広が村田・大旗建築事務所を離れ高田建築事務所を設立。 |
| 昭和41年 | 村田相互設計事務所設立。同年大旗連合設計事務所設立。 |
| 昭和41年 | 河内義就設計事務所から錦織亮雄しか離れ都市建築研究所設立。 |

注：表3は、生前（故）村田正、（故）河内義就、大旗正二の本人に連絡を取り、訪ねるなどを基に、書き残した資料及び他当時の関連記事などの文献と調査を通じて筆者が作成した。

### 3、暁設計事務所の建築家

**3-1 村田正：**村田正（以下村田と略す場合ある）は、大正12月15日広島市で生まれた。昭和8年3月15日広島市立広島工業学校建築科を卒業、同年4月広島県土木部営繕課現場監督員として勤務、昭和13年3月辞任し、同年4月から昭和15年5月にかけて東京の渡辺仁建築事務所に所属していたが、広島に帰り、昭和15年6月からは東洋工業株式会社在職、昭和20年9月退職し、同年10月から暁設計事務所の設立準備に関わった。昭和21年4月に暁設計事務所を設立し、暁設計事務所の代表になる。当時村田は建築設計より主に建築設計の注文などの対外的な交際活動を行ったと言われる[27]。昭和29年には村田・大旗建築事務所を設立し代表となり、昭和41年に村田相互設計事務所を設立した。昭和54年広島市建築行政協会会長に就任、昭和61年11月日本建築家協会会員として永年の功績対し終身会員に推挙されている。平成元年1月23日広島で死亡。村田の主要な経歴についてまとめると表4のようになる。

**表4　村田正の略歴年表**

| 年　月 | 出　来　事 |
|---|---|
| 大正3年 | 12月15日、広島市中区千田町1丁目571番地で生まれた。 |
| 昭和8年 | 3月15日、広島市立広島工業学校建築科卒業。 |
| 昭和9年 | 4月1日～昭和13年3月31日、広島県土木部営繕課現場監督員。 |
| 昭和13年 | 4月～昭和15年5月、東京の渡辺仁建築事務所在職。 |
| 昭和15年 | 6月～昭和20年9月、東洋工業株式会社在職。 |
| 昭和20年 | 10月～昭和21年3月、暁設計事務所設立準備。 |
| 昭和21年 | 4月暁設計事務所を設立し、昭和29年6月まで事務所代表者。広島市カトリック教会司祭館と朝日支局を設計。 |
| 昭和23年 | 広島建築家クラブの会員。（暁設計事務所の代表） |
| 昭和27年 | 広島県建築士会監事（昭和51年まで）。「建築設計監理業務規定」（昭和27年7月制定）の特別委員会委員。 |
| 昭和29年 | 昭和35年まで広島市建築行政協会理事。村田・大旗建築事務所設立。欧州へ視察に出張。「欧州視察報告」発表講演会昭和29年11月27日。 |
| 昭和30年 | 5月広島市都市計画に対するアンケートに参加。 |
| 昭和34年 | 10月1日、大旗と八幡製鐵病院の競技設計において入選。12月、大旗と戸畑文化センター競技設計において入選。 |
| 昭和35年 | 広島県建築士会監事。広島市建築行政協会理事。日赤広島支部庁舎の設計が広島建築士会建築作品コンクールに入賞。（入賞作品は6点） |
| 昭和36年 | 広島市建築行政協会副会長。 |
| 昭和37年 | 11月14日、日本建築士連合会長から日本建築士会創立10周年を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。 |
| 昭和38年 | 広島市建築行政協会副会長（昭和53年まで）。 |
| 昭和39年 | 住宅設計懸賞募集審査会審査員。 |
| 昭和40年 | 5月内閣総理大臣より厚生保護事情の功績により紺綬褒章を受章。 |
| 昭和41年 | 村田相互設計事務所設立。 |
| 昭和45年 | 7月～昭和46年6月ライオンズクラブ国際協会広島クラブ会長。 |
| 昭和49年 | 4月～平成元年1月鈴峯女子短期大学講師。 |
| 昭和50年 | 10月～平成元年1月学校法人鈴峯学園評議員。 |
| 昭和54年 | 広島市建築行政協会　会長（昭和57年解散まで）。 |
| 昭和55年 | 12月～平成元年広島市心身障害者対策協議会福祉環境整備専門委員。 |
| 昭和57年 | 協会解散。広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よむせよ』に「会長の挨拶」、「初講義」を発表。 |
| 昭和61年 | 1月～平成元年1月広島県建築士事務所政経研究会会長。11月日本建築家協会会員として永年の功績対し終身会員に推挙せられる。 |
| 昭和63年 | 2月～平成元年1月(社)日本建築士事務所政経研究会副会長。 |
| 平成元年 | 1月23日死去。 |

注：表4は村田正氏の生前聞き取りと村田相互建築事務所から提供された資料を基に、又広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よせむね』昭和58年1月28日発行。社団法人広島県建築士会、『広島県建築士会25年史』、昭和53年3月10日発行。などを参照として筆者が作成した。

**3-2 河内義就：**河内義就（以下河内と略す場合ある）は大正2年6月13日広島の国泰寺町で生まれ、昭和6年3月広島県立広島第一中学校卒業。昭和10年3月1日横浜高等工業学校建築科（現横浜国立大学）を卒業し、中村順平の弟子に当たる。学校時代の習作として「飛曼閣正面図」があり、『建芸』上頁179に掲載されている。卒業後、逓信省の経理局営繕課において、山田守の元で仕事をし[28]、昭和14年7月1日満州国郵政局経理科営繕股技士に就任、昭和18年4月技佐に昇任する。昭和19年9月満州国大同学院17期後期修了、昭和20年8月19日免官帰国、昭和21年10月1日暁設計に参加したのである。暁設計で重要建築物の設計を担当したのは河内であった。当時の代表作として取り上げられるのが、児童文化会館、社会保険広島市民病院の設計であり、昭和23年の広島世界平和聖堂のコンペに参加して準佳作に当選している。翌年3月10日広島平和公園計画設計競技に入賞。昭和26年には独立し、河内義就設計事務所を設立する。昭和38年広島設計監理協会会長に就任。昭



NII-Electronic Library Service

和 47 年からは広島工業大学特任教授、昭和 53 年広島県建築事務所協会 7 代目会長、昭和 58 年日本建築学会中国支部長。昭和 62 年 10 月 5 日広島で死亡。河内の主要な経歴と活動についてまとめると表 5 のようになる。

表 5 河内嘉就の略歴年表

| 年　月 | 出　来　事 |
|---|---|
| 大正 2 年 | 6 月 13 日広島市国泰寺町生まれ。 |
| 昭和 6 年 | 3 月広島県立広島第一中学校卒業。 |
| 昭和 10 年 | 3 月 1 日、横浜高等工業学校建築科を卒業。中村順平の弟子に当たる。4 月 1 日、逓信省経理局営繕課で山田守の元で仕事をする。 |
| 昭和 13 年 | 4 月 1 日逓信省経理局営繕課技手に就任。 |
| 昭和 14 年 | 7 月 1 日任満州国厚生局経理科営繕課技士（係）。 |
| 昭和 18 年 | 4 月 1 日任技佐。 |
| 昭和 19 年 | 9 月満州国大同学院 17 期後期修了。 |
| 昭和 20 年 | 8 月 19 日満州国崩壊し捕虜上免官帰国。 |
| 昭和 21 年 | 10 月 1 日暁設計事務所に就職。 |
| 昭和 23 年 | 6 月 30 日広島平和記念カトリック聖堂設計コンクール入賞。 |
| 昭和 24 年 | 3 月 10 日広島平和公園計画設計競技に入賞（広島市）。 |
| 昭和 26 年 | 2 月 20 日独立して河内嘉就設計事務所を設立。 |
| 昭和 29 年 | 9 月、グロピウスとの座談会に参加。（11 名参加丹下健三含）広島市建築行政協会理事（昭和 29～昭和 54 まで）。 |
| 昭和 30 年 | 5 月広島市都市計画に対するアンケートに参加。 |
| 昭和 31 年 | 広島県建築士会理事。 |
| 昭和 32 年 | 広島県建築士会常務理事（昭和 32～昭和 38 まで）。 |
| 昭和 33 年 | 欧州への視察。平和記念館で「欧州視察旅行帰朝報告」講演会昭和 33 年 1 月 18 日。「ヨーロッパより帰りて」を建築士会誌に発表。 |
| 昭和 34 年 | 広島労働金庫設計が広島県建築士会建築作品コンクールに入賞。 |
| 昭和 35 年 | 「建築設計監理業務規定」改正版、昭和 35 年 3 月 1 日、の委員会に委員長。広島銀行宮島結成道場の設計が広島建築士会建築作品コンクールに入賞。 |
| 昭和 36 年 | 1 月 10 日から日本建築学会中国支部常議員。5 月 15 日から日本建築協会常議員。5 月 21 日農林大臣より、備後地方総合開発推進の功労により表彰。 |
| 昭和 37 年 | 広島市建築行政協会副会長。11 月 14 日、日本建築士連合会長から日本建築士会創立 10 周年を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。11 月 17 日、広島県建築士会から表彰された。 |
| 昭和 38 年 | 広島県設計管理協会三代目会長（昭和３８～昭和４１）。5 月 12 日農林大臣より備後地方総合開発推進の功労により表彰。 |
| 昭和 39 年 | 広島県建築士会理事（昭和 51 年まで）。8 月 8 日住宅設計懸賞募集審査会審査員。12 月 13 日座談会、「建築士会は如何にあるべきか」に出席。「建築設計監理料率について」会報に発表昭和 39 年 12 月。 |
| 昭和 40 年 | 2 月日本建築士連合会主催の懸賞競技建築設計応募作品の審査員。 |
| 昭和 42 年 | 10 月 25 日、日本建築士連合会長から日本建築士連合会創立 15 周年を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。 |
| 昭和 45 年 | （協）広島県設計技術センター理事。 |
| 昭和 46 年 | 5 月 29 日広島県建築士会から表彰された。建築士会発展に寄与賞。 |
| 昭和 47 年 | 4 月 1 日広島工業大学特任教授。11 月 20 日、日本建築士連合会長から日本建築士連合会創立 20 周年記念並びに第 15 回建築士会全国大会を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。 |
| 昭和 48 年 | 河内嘉就「拡大する郊外団地からの通勤輸送（合併後の大阪輸送はモノレールで）」／『交通と運輸』第 3 巻第 1 号昭和 48 年 1 月 15 日所収。 |
| 昭和 51 年 | 広島県建築士会専門委員会委員（設計管理委員会委員）。 |
| 昭和 53 年 | 5 月 19 日広島県建築事務所協会七代目会長昭和 56 年まで。 |
| 昭和 58 年 | 日本建築学会中国支部支部長。 |
| 昭和 59 年 | 河内嘉就「ひろしまの建築今昔」日刊中国建設新聞（現在は中建日報）昭和 59 年 4 月 13 日～昭和 59 年 5 月 14 日版に連在。 |
| 昭和 62 年 | 10 月 5 日死亡。 |

注：表 5 は河内嘉就の生前の聞き取りと河内嘉就建築設計事務所から提供された資料を基に、又広島市建築行政協会創立 30 周年記念誌『よせむね』昭和 58 年 1 月 28 日。社団法人広島県建築士会『広島県建築士会 25 年史』、昭和 53 年 3 月 10 日。などを参照として筆者が作成した。

**3-3 大旗正二**：大旗正二は大正 5 年（1916 年）島根県で生まれ、昭和 9 年に横浜高等工業学校建築科を卒業し、中村順平の弟子に当たる。学校時代中村順平の指導の元で写作として「TEMRLE D'ERECHTHEE A ATHENES」、「厳島神社高舞台及び拝殿」、「法隆寺百斎観音厨子」がある。このように中村順平のボザール式の建築教育を受け、建築そして環境芸術への情熱は、大旗の若い心へ植え付けられていた。卒業後、南満州鉄道株式会社大連本社地方部建築課に奉職し、昭和 15 年満鉄大連工事事務所建築係技術員として活躍する[29]。満州での仕事について、浜口隆一は「そこでは時代の幸運もあって、単に個々の建物を設計し、作ると言うだけでなく、地域開発や都市計画の課題にも、とにかく取り組む機会が与えられ、これは大旗氏の眼をひろく開けてくれるものだった。」[30]として評価している。大旗の自述によると、大連で大連駅の設計に関係し、いろいろな病院と別荘の設計にも参加したという。当時大連では建築設計において建築技術者資格が義務づけられており、その時大旗は主任技術者資格を持っていたのである[31]。昭和 20 年終戦でソ連に抑留され、昭和 23 年に帰国した。在ソ連時の大旗について、陶芸家加藤塘九郎は「昭和 31 年、AA 連帯委員会の文化芸術使節団が結成され、ソ連に行って新設のオペラ劇場を見学の際、建築には、コスモポリタリズムとローカリズムの二つの方法がある。この劇場は建築家ジェセフの設計で、ウズベック様式であり、内部の各室には、ウズベック各都市旧来の様式を取り入れている。この劇場の完成には、日本人捕虜の中の優れた建築家の力も大きく助けているといわれました。…そんなある日、…日本人捕虜の中の優れた建築家というのは、大旗先生であったことがわかったとき、私は驚き、そしてこの巡り合わせを嬉しく感じた。」と述べている[32]。確かに大旗自身も述べるように、「ソ連ではいろんないい人に恵まれて、大学の図書館とかにも入れるようになり、建築デザインにも参加した」[33]と言う通りである。昭和 23 年帰国し、同年 10 月暁設計に入ることになった時、その心情について大旗は「東京に行くか、広島に行くか、非常に大きい事柄だった。しかし広島には河内氏がいたが、何か大きな魅力がありました。それで広島に着いた。」と述べている[34]。大旗が暁設計に参加してから、3 人の建築家は本格的に農協ビルの設計に取り込んだ。大旗は 3 人の建築家の中唯一人健在であり、直接聞き取りも行い、整理した経歴をまとめると表 6 のようになる。

表 6　大旗正二の略歴年表

| 年　月 | 出　来　事 |
|---|---|
| 大正 5 年 | 島根県で生まれ。 |
| 昭和 6 年 | 横浜高等工業学校建築科入学し、中村順平の弟子となる。1 年生の時「TEMRLE D'ERECHTHEE A ATHENES」建築図画と宮島 3 週間宿泊にて一部の実測を行い「厳島神社高舞台及び拝殿正面図」（150ｃｍX70ｃｍ図版墨石仕上げ）描く。 |
| 昭和 7 年 | 2 年生の時法隆寺百斎観音厨子（展覧会用）エスキス（木炭紙全紙）。 |
| 昭和 8 年 | 満州産業開発学徒研究団に加わり、一ヶ月間の全満視察旅行をする。 |
| 昭和 9 年 | 3 月横浜高等工業学校建築科を卒業。4 月南満州鉄道株式会社、大連本社地方部建築課に入社。 |
| 昭和 12 年 | 昭和嘉就所事務所本館コンペ 2 等入選（満鉄建築課田島勝雄に協力）。満鉄大連駅工事中設計変更などに関係。 |
| 昭和 13 年 | 10 月 20 日、大連市公会堂コンペ佳作。荒井定吉（横井建築事務所）と共同。 |
| 昭和 15 年 | 広島の女性と出雲大神社で結婚。満鉄大連工事事務所建築係技術員。 |
| 昭和 20 年 | 長男が大連で生まれる。終戦で捕虜としてソ連に行く。ウズベッキスタンで建築家ジュセフと一緒に仕事をし、共同作品としてオペラ劇場がある。 |
| 昭和 23 年 | 7 月帰国し島根県に帰る。8 月広島にて村田正、河内嘉就に合う。同年 10 月暁設計事務所に入所。入所同時に広島県信用組合連合会会長柴田哲夫並に総務部長行広守氏の推薦により、連合会本部事務所、計画。12 月 10 日実施設計決定。 |
| 昭和 24 年 | 3 月初旬農協実施設計完了。広島平和公園コンペに参加。 |
| 昭和 29 年 | 6 月、村田・大旗建築事務所設立。 |
| 昭和 34 年 | 10 月 1 日、村田正と八幡製鉄病院の競技設計において入選の栄誉を受けられた。12 月村田と戸畑文化センター競技設計において入選せられた。 |
| 昭和 37 年 | 2 月 3 日藤田講堂、「欧米視察報告会」の発表。 |
| 昭和 40 年 | 2 月 23 日、日本建築士連合会主催の懸賞競技建築設計応募作品の審査員（日本建材協会中国支部展示場）。 |
| 昭和 41 年 | 3 月、大旗連合建築事務所設立。当時の職員は 28 名。 |
| 昭和 43 年 | 昭和 43 年～昭和 53 年、広島市建築法規研究会理事。 |
| 現在 | 大旗連合設計事務所の相談役。 |

注：表 6 は大旗正二氏に聞き取りを行い、又広島市建築行政協会創立 30 周年記念誌『よせむね』昭和 58 年 1 月 28 日発行。社団法人広島県建築士会、『広島県建築士会 25 年史』、昭和 53 年 3 月 10 日発行。西澤泰彦「南満州鉄道株式会社の建築家―その変遷と特徴」『アジア経済』35 巻 7 号、1994 年 7 月。などを参照として筆者が作成した。

## 4、暁設計事務所の諸活動

暁設計事務所は、昭和 21 年に発足し、焼け野原になった広島を背景に活発的に建築の設計活動を行なった。その初の設計として取り上げられるのが昭和 21 年末に小町電車道の所に建てられた朝日新



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

聞広島支局と幟町の広島カトリック教会の司祭館である。この二つの建物は木造であるが村田正の作品であった。河内義就はこの二つの作品について「当時市内は、壕舎及び焼トタンぶきのバラックが、少々建っていました。本通には、屋台のような一坪位の店が置いてあったようです。でも、目を引く建物が二つありました。小町電車道、今の東急インの所に朝日支局があり、15 坪位のバラックながら、焼レンガを集めたマントルピースの煙突が立ち、いかにも瀟洒に見えました。それと、幟町カトリック教会の神父館が、GHQ の威光か、ドイツ風木造洗出しの堂々たる本建築。この二つが村田君の作品でした。センスがあって、私は驚いたものです。」と述べ[35]、当時広島の復興の惨景を語る一方、村田の建築家としてのデザイン性を示している。昭和 22 年に入って設計は主として河内義就が担当したが、その作品として確認できるのが、広島女学院中、同高校校舎及び講堂、山陽中学校、広陵高校などがある。これらの建築の設計には、夜業、徹夜も連日のような勤務であり、当時の月給は五百円限度であったという[36](当時コーヒー10 円、タバコ 10 円であった)。その後、広島児童文化会館（写真 1)、広島ガスビルなどを手掛けた。これらは何れも木造であったが当時の広島においては斬新な設計であった[37]。このような設計業務の存在は戦後の広島の建築設計業界を活気づけ、前途に希望を抱かせたであろう。その後、大旗正二も暁設計に参加し、3 人の建築家は協同して大正海上火災保険 KK 広島支店、農協ビル（写真２、３)、社会保険広島市民病院（写真４)、広島百貨店、等の本格的な鉄筋コンクリート造建築の設計を始めたのである。昭和 28 年竣工の呉社会保険出張所庁舎も暁設計の設計であった。終戦直後広島における暁設計の作品と確認できる建物をリストすると表７のようになる。

その他、暁設計事務所は昭和 23 年平和聖堂のコンペ、昭和 24 年平和記念公園コンペにも参加し、河内のコンペ案は平和聖堂コンペの準佳作、平和記念公園コンペ佳作を受賞した。衆知のようにこの二つのコンペは、日本全国、さらには世界的にも注目され、多くの建築家達が参加した。河内のコンペ案はどのような計画案だったのかは不明であるが、こうした章を受賞したという事実だけでも、彼のデザイン力の高さをうかがうことができるだろう。このように暁設計は広島を中心に積極的に建築活動を行う一方、島根、岡山、さらには九州にまで活動の範囲を広げた[38]。河内義就によると村田の営業力は抜群で、全国的にで営業を展開して名古屋市民病院や宇部病院、徳山市民病院など、各地の注文をとってきたという。河内によると太田川工事事務所から建築設計管理協会に橋の親柱、高欄の設計依頼があって、協会の同志間でコンペをやろうということになり、7 案程集めたという。しかし橋脚、路盤は最低限工費で、何ら新鮮味のない姿で建設されつつあった。ちょうどその頃丹下健三が来広し[39]、中国地建の人が丹下健三にその審査を依頼したという[40]。平和記念館がやや出来た頃にイサム・ノグチ[41]が見たいといって河内が同行してやってきた時、丹下健三がイサム・ノグチに欄干の制作の話を持ち掛け、市長[42]も同意し、イサム・ノグチが制作することになり、暁設計らの案は消えたのである。河内は「…もちろん何の礼もなく、挨拶もなかったように記憶しています。」[43]と当時の気持ちについて述べている。その他河内によると、昭和 25 年頃日本都市計画協会の事務理事で、早稲田大学の出身の秀島乾が来広し、四つ角をロータリーシステムにしたパリ風都市計画図を作られ、河内が鳥瞰パースを書いたが、不発に終わったこともあった[44]。以上により、暁設計のコンペ活動と広島以外の他地方における作品活動をまとめると表８のようになる。

**表７　広島における暁設計事務所の関係した建物リスト**

| 竣工年 | 建　物　名　称 | 構造 |
|---|---|---|
| 昭和21年 | 司祭館 | 木造 |
| 昭和21年 | 朝日支局 | 煉瓦造 |
| 昭和22年 | 広島女学園中、高校校舎 | 木造 |
| 昭和22年 | 広陵高校 | 木造 |
| 昭和23年 | 山陽中学 | 木造 |
| 昭和23年 | 広島女学院講堂 | 木造 |
| 昭和23年 | 毎日新聞広島支局 | 木造 |
| 昭和23年 | 児童文化会館 | 木造 |
| 昭和24年 | 広島ガスビル | 木造 |
| 昭和25年 | 農協ビル | RC造 |
| 昭和25年 | 大正海上火災保険KK広島支店 | RC造 |
| 昭和26年 | 社会保険広島市民病院 | RC造 |
| 昭和27年 | 広島百貨店 | RC造 |
| 昭和27年 | 社会保険広島市民病院仕上及び管理棟（増築） | RC造 |
| 昭和28年 | 社会保険広島市民病院第２病棟看護婦棟 | RC造 |
| 昭和28年 | 呉社会保険出張所庁舎竣工。 | 木造 |
| 昭和28年 | 広島中央放送局局舎（増築） | RC造 |
| 昭和29年 | 広島中央放送局長社宅 | RC造 |

注：表７は社団法人広島県建築士会、『広島の建築１／1945～1955』昭和31年９月30日。社団法人広島県建築士会、を基に、その他、「礎30年のあゆみ／清水建設株式会社広島支店」昭和50年７月。なお、村田、河内、大旗氏の残した資料と聞き取りによって確認し筆者が作成した。

**表８　暁設計のコンペ活動と広島以外の他地方における活動表**

| 時　期 | 建築名称及び出来事 |
|---|---|
| 昭和23年頃 | 名古屋市民病院設計。 |
| 昭和23年頃 | 宇部病院設計。 |
| 昭和23年 | 広島平和記念聖堂コンペへ参加。河内義就の案は準佳作ともなっている。 |
| 昭和24年頃 | 徳山市民病院設計。 |
| 昭和24年 | 広島平和記念公園コンペへ参加。河内義就の案は佳作になった。 |
| 昭和25年頃 | 日本都市計画協会（石川会長）の事務理事で、早稲田大学の出身の秀島氏が来広され、四つ角をロータリーシステムにしたパリ風都市計画図を作られ、河内が鳥瞰パースを書いたが、不発に終わった |
| 昭和26年 | 広島平和大橋のコンペに参加。 |

注：表８は河内氏、大旗氏の回想によって作成した。九州、岡山などでの活動も認められるが、詳しいことは大旗氏も記憶していない。

以上のように暁設計が関係した復興建築は、当時の背景の中で数多く、個々の建築には３人の建築家の心血が注がれている。河内義就は「免も角当時の暁設計は市内の主だった建物の 70%位手掛けたように思う」[45]と後になって述べている。村田正は「私たちが復興の時代に築きあげた建物は年々その面影をなくしています。しかし今の広島を語るとき広島を愛した人々の血と汗と涙の結晶を語らないわけにはいきません」[46]と述懐しているように、広島の戦後復興の中で、多くの建築家や技術者が心血を注いだことが想像される。なお、河内義就は「原爆焼け野原のデルタの復興は給排水、橋、道路、ガス、送電といったインフラが根底にあり、70 年草木も生えぬだろうと言われたこの市に市民が食料、住宅難の中で生き抜き何とか自分のバラックを建て事務所を作らねばならなかった精神面の努力と熱意にあった事は疑いにない事だ。しかし、目に見える仕事は設計家及び大工さん、後のなってぼつぼつ成立した建設業者の業績であった。」[47]と復興における事務所の役割を述べている。

## 5、暁設計事務所の主要作品とその役割

以上により、暁設計事務所の設立と変遷、主要建築家の経歴、諸建築活動を明らかにした。本章では、広島の復興過程を語る上で重要な意味を持つ建築であるだけでなく、暁設計事務所の設計活動を考える上でも興味深い建物であると思われる広島児童文化会館、農協ビル、社会保険広島市民病院の建築を取り上げ、その建設経緯、建築特徴などを検討する作業を通じて、暁設計事務所の設計活動の特徴とその役割について若干の考察を試みる。



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

5-1 広島児童文化会館

被爆後 70 年は草木もはえぬ、と言われた広島は世界注視の的であり、日本中からも建築のメッカとして熱い眼を注がれていた。それだけに、世界中から同情と寄金が寄せられ、国中からも公共建築、企業の支店などへの投資が圧倒的に寄せられた。ABCC が比治山山頂の旧軍用墓地を撤去し、米国の資金で建設されたのも 22 年であった。

このような背景の中で、広島児童文化振興会[48]の発足によって、500 万円の予算で児童文化会館が建設されることになった。会館建設にあたっては、GHQ の民間情報教育局（CIE）顧問、ハワード・ベル博士の後押しもあり、壮大な計画でスタートした。『新修廣島市史／第四巻／文化風俗史編』[49]（昭和 33 年 12 月 27 日）によると、最初の計画では、定員 1,200 人のホールを持つ会館本体のほかに、児童体育衛生館・国際親善館・科学工学館・児童図書館・美術館などの独立館が構想され、付属施設として小動物園・児童遊園・植物園も加えられていたという。児童文化会館建設構想は、全国的な反響を呼んだ反面、建設資金も十分に集まらないまま着工され、昭和 23 年 5 月 3 日完成、開館式が挙行された[50]。設計は暁設計事務所が担当し、施工は清水建設広島支店が担当した。清水建設株式会社広島支店の「礎／30 年のあゆみ」[51]によると、会館は昭和 22 年 11 月着工、昭和 23 年 5 月竣工となる。請負金は 10,669,265 円であった。『新修廣島市史／第四巻／文化風俗史編』[52]に「建坪階上階下あわせて 475 坪余、映写室を備え、オーケストラボックスをも整え、200 ㎡の舞台を設置した」と記載されているように、木造ながら、1000 人収容の劇場スタイルの建築であった。造形を見ると、会館はホールの円筒状の屋根を中心に、機能によって造形を組み合わせようとした工夫が認められる。入り口は、丸い柱を連続させるなど開放的な感覚を表し、閲覧室部分は、円滑なる曲面を入れて大きな窓を設ける等モダンなデザインになっている。又いずれの窓も細かくデザインされ、積木細工のような印象をあたえる設計になっている。全体的には大空間の木造建築として重厚な感じの建築になっているが、細部的には非常に軽快で、むしろ華奢な感じのするスマートな建物にも見える。設計について河内は「私が築地小劇場のファンで、それとほとんど同様のスタイルで建て、1 階階段状の客席の見やすい構成とし、舞台も相当広くとったためでしょう、画家の福井芳郎氏をわずらわせて、正面のアーチ状の壁面に楽しい壁画を書いてもらいました。」[53]と後になって述べているように、築地小劇場の階段式ワンフロアの客席、舞台の広さなどの設計手法を児童文化会館の設計に採用したのである[54]。なお壁画を取り入れるなど詳細なデザイン工夫が認められる。このような、大空間の木造建築は当時の広島は勿論、戦後日本の大空間建築史を語る上でも興味深い建物であると思われる[55]。映写室、オーケストラボックス、大舞台を備えたこの会館は、市内では唯一の大ホールであった。「砂漠に学童の天国」、「原爆の爆心地に文化の爆心地」とうたわれ、子供文化祭などの学童向けの催し物は勿論、各種の文化行事が多彩に開催され、「おとな文化会館」とも言われた[56]。子供のために会館としての目的であったが、催し物、芝居、講演と活用され、新劇の千田是也、宇野重吉、滝沢修らには、地方にこれだけの舞台があったとはと驚かれたと言われる[57]。ハワード・ベルは式に参列して、「米国でも見たことのない施設」[58]とほめている。児童文化会館建築の竣工写真は世界に報道され、広島のシンボルとして宣伝された。当時の暁設計事務所は 33～35 才位の働き盛り 10 人位のグループだった。当時、朝日新聞の文化担当、江藤文比古は「凍れる音楽と言われる建築を創造する若者達」[59]として、全国版へ暁設計を紹介したのであった。建築する時は設計事務所に依頼するものだとの常識が少しずつ定着したのもその頃からであったと河内は後になって述べている。

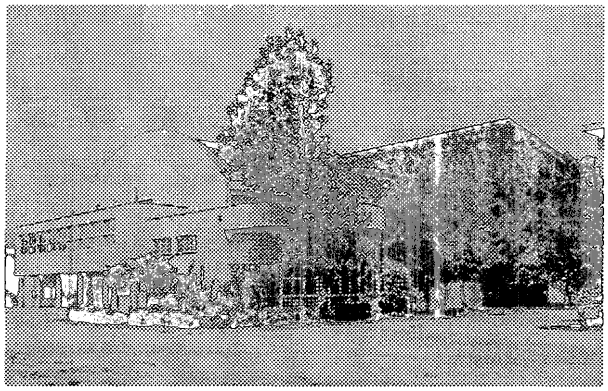

写真 1 児童文化会館(昭和２３年竣工)

5-2 広島農協ビル

復興期の広島でめだった仕事として、昭和 24 年に昭和町に建設された RC、4F の 3 棟の市営住宅と観音の県営住宅であった。昭和町のアパートの設計は、当時英豪軍のジャビー少佐が指導したと言われ、構造を担当したのは藤本初夫だった。この 2 件は戦後の広島では初めての RC 造集合住宅であった。次に暁設計の村田の努力で全国初の民間 RC 造事務所への資材配布が認められたのが県信連と農協ビル[60]であった。

昭和 24 年に着工し、昭和 25 年に竣工した農協ビルは、鉄筋コンクリート造にて 4 階建て（営業室部分は 2 階建て）になっている。建設当時、現場に常駐し、管理した河内義就の記憶によると全工事費は 6800 万円位だったという。施工は KK 間組であった。この建物は、客を外から直接入れる地下のグリルや龍山石を貼った外壁と柱列のある営業室のデザインが特徴を表わしている。営業室の外部デザインは、迫り出した 2 階軒部分を支持するための露出した柱が並んで外廊下を形成し、その柱頭と軒の辺りの部分がデザインされて、そのためやや彫の深い建物となり、道路の向かい側の被爆建築である広島市役所[61]との調和を表している。なお、この建物はその建築的特徴より、その建設過程が当時の広島の復興建築を語る上で意味深い建物である。大旗は、「昭和 22 年頃、設計事務所は社会的に地位が余りなく、建物を建てるために設計をすることであった」[62]と当時の復興建設の初期においての建築家の役割について述べている。被爆直後の建築は、まず材料ができてから、建物の建設が着工される、ということになったので、鉄筋とコンクリートを確保しさえすれば、設計事務所の設計が現実化するという状況であった。このような背景の中での初の鉄筋コンクリート造の事務所建築である農協ビル[63]について大旗は、「市役所前の農協ビルをやってもらって、当時は全国的に、規模において一番大きいんじゃないかと思うんです。まだセメントも、鉄筋も何かも得られない時に、そういうものをつくりたいと意欲を燃やしていた。今思いますと、あの建物は困った建物になっているんだけど、当時としては、歴史的に見ても広島発展のもと、ひいては日本的なもんじゃないかと思います。あえてそれができたということは非常に広島の発展に大いに寄与したし、



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

われわれもそれによって育てられたと思っているんです。」と述べている[64]ように、鉄筋コンクリート造の農協ビルの勇姿は、戦後の荒廃から立ち上がる近代的な事務所建築のモニュメントであった。

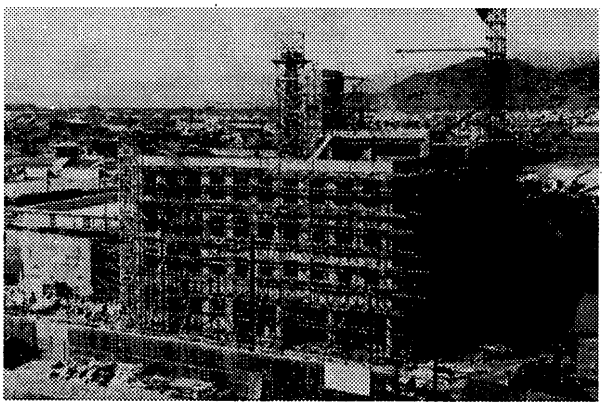

写真２建設中の広島農協ビル

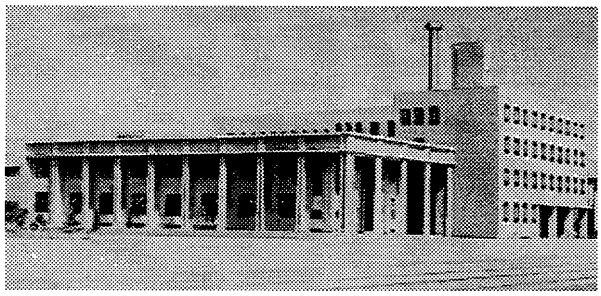

写真３広島農協ビル（昭和２５年竣工）

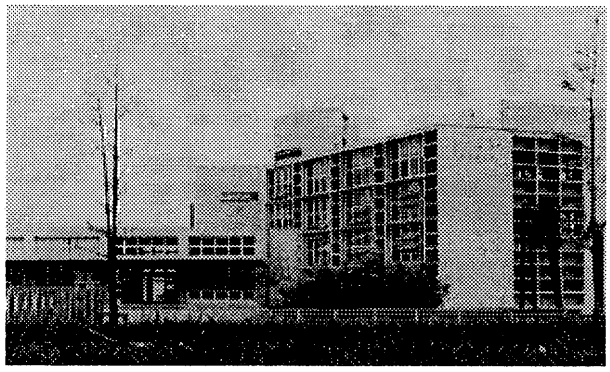

写真４社会保険広島市民病院（昭和２６年竣工）

**5-3 社会保険広島市民病院**

建築基準法[65]が昭和 25 年 5 月 24 日公布され、11 月 23 日施行された。建築士法[66]も同年 5 月 24 日公布され、7 月 1 日からの施行となった。それに伴って、資材も自由販売になり、建築家も社会的に認められ始めたのである。

このような時期に、暁設計が手を掛け始めたのは社会保険広島市民病院である。基町の旧軍用地に、国有地の譲与を受けて広島市が建設したのである。昭和 26 年に竣工した[67]市民病院はその第一期計画と、将来の全敷地の総合計画をプランしたのは河内義就であった。施工は清水建設広島支店が担当した。市民病院は鉄筋コンクリート造にて建てられ、診療棟は 4 階（局部 5 階）、病棟は 2 階と 3 階になっている。清水建設広島支店からの情報[68]によると、建築規模は 962 坪で、請負金は 4900 万円であった。敷地が広く、立地条件がよく、市民へのサービスが期待された施設であった。病院は新しい病院計画のあり方を示し、明確なゾーニングと動線の構成による機能的な平面計画になっている。ファサードは白い壁、大きな開口に厚さ 4 センチメートルのコンクリート打ちによる薄い庇を付け、その特徴を表している。河内は「第一期の造形構成は、イサム・ノグチ氏にほめられたものであったと述べている。当時の構想通り、現在の高層棟が建ちました。」と後になって述べている[69]。市民病院はその後、続いて社会保険広島市民病院の改修及び管理棟（昭和 27 年増築）、社会保険広島市民病院第 2 病棟看護婦棟（昭和 28 年）などが増築されたが、何れも暁設計事務所の設計であった。市民病院の第 1 期設計の完了を機として、河内義就が 5 年間の暁設計勤務を辞し、独立した。河内も述べているように、その頃からは広島でも建築家が認められはじめ、中央からも一流の事務所が進出しはじめ、大手ゼネコンの設計も、どんどん進出してきたのである[70]。

以上のように、暁設計事務所の設計の児童文化会館（昭和 23 年）、農協ビル（昭和 24 年）、社会保険広島市民病院（昭和 26 年）の建築は、後の、丹下健三の設計の広島児童図書館（昭和 27 年）、ピースセンター（昭和 30 年竣工）、村野藤吾の設計の広島平和記念聖堂（昭和 29 年）などの建築と共に、戦後の広島復興過程を語る上で欠くことの出来ない建築であり、それらの建物が焼け野原の中に順次に立ち上がってくる様子は、市民の強い関心を引いたのであろう。

**6、結び**

以上のように、暁設計事務所は、戦後広島における最初の設計事務所として誕生し、その後の数多くの建築事務所形成の原点となった。その設立は、広島県建築士事務所協会の前身広島建築家クラブの結成と発展に大きな影響を及ぼした。暁設計事務所において、主要な建築活動を行ったのは村田正、河内義就、大旗正二 3 人の建築家であり、彼らは戦後広島の建築界のルーツとして、広島の復興建築において大きな影響力を有した建築家であり、彼らが関係した復興建築は、当時の背景の中で数多く、個々の建築には 3 人建築家の心血が注がれている。特に、大空間の木造建築の設計に挑戦した児童文化会館、周囲環境との調和を深く意識してデザインした戦後初の民間 RC 造事務所建築である農協ビル、病院に薄い庇を付けようと厚さ 4 センチメートルのコンクリート打ちに挑戦した社会保険広島市民病院などの建築は、広島平和公園、広島世界平和聖堂等のように注目されるほどの建築物ではなかったが、広島の復興を語る上で重要な意味を持つ建築物であるだけでなく、日本の戦後建築史を語る上でも興味深い建物であると考える。又、村田は長島局長に記念聖堂建設の計画を伝える役割を担うことになり、全国初の民間 RC 造事務所への資材配布を求め努力する等、積極的な活動を行ったことなどを評価したい。

本稿は、暁設計事務所の設立と 3 人の建築家の経歴及びその活動についての考察にやや重点を置いた為、個々の作品について、その傾向、特徴などについては詳しい分析を行うことができなかった。また、3 人建築家の独立後の業績は大きく、広島の建築事業の発展に大きな影響を及ぼしたが、その建築家の作品傾向と変遷、制作態度、建築観、事務所の経営、などについては別稿に譲りたい。

**【謝辞】**：本論文をまとめるにあたり、（有）河内義就設計事務所代表取締役河内国利氏、（株）村田相互設計本社取締役総務部長栗本氏から貴重な資料を提供されていただき、暁設計事務所時代 3 人の



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

建築家の 1 人であった大旗正二（(株）大旗連合建築設計相談役）先生から貴重な教示と情報をいただいた。又「戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究」グループの客員教授グループの東京大学教授藤森照信先生、京都大学助教授布野修司先生、そして広島大学教授杉本俊多先生、佐賀大学教授丹羽和彦先生からは貴重なご教示をいただいた。記して深謝申し上げる。

注：

1）暁設計事務所については、設立当時、「暁設計事務所」、「暁建築工業所」、「暁設計工務店」とも呼ばれたことがあったというが、本稿では、その創設者であった村田正の残した資料とその他関係者の証言により、暁設計事務所と称する。

2）彼らは暁設計事務所において一定期間の協同での建築活動を経てそれぞれの事務所を設立し、広島の現代建築にも大きな役割を果たしたとされている。

3）西澤泰彦「建築家中村世興資平の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第450号1993年8月P151～160。角 幸博「建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について」日本建築学会計画系論文集第465号1994年11月P175～181。上田恭嗣「建築家葛師寺主計の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第509号1998年7月P209～215。石田潤一郎『関西の近代建築』中央公論美術出版社、1996年。川島智生「大正期大阪市の鉄筋コンクリート造小学校の成立と民間建築家の関連について」日本建築学会計画系論文集第489号P213、1996年11月。石丸紀興、李明「建築家増田清の経歴と広島における建築活動について」日本建築学会計画系論文集第525号1999年11月P327～334。

4）資料的には、可能な限り暁設計に関する資料を収集することにつきるが、そのために例えば少しでも暁設計について触れた文献・資料を検索・収集すること、(故）村田正、(故）河内嘉就、大旗正二の本人や近族に連絡を取り、訪ねるなどして私的な資料を含めて収集することなどによって補完した。生前村田氏には昭和60年10月1日のヒアリング調査。生前河内氏には昭和59年3月28日ヒアリング調査。大旗氏には平成11年2月15日によりヒアリング調査を行った。近族にも連絡を取り、いくつかの情報を収集した。

5）暁設計事務所の設立と変遷については（故）村田正、(故）河内嘉就、大旗正二本人に連絡を取り、訪ねるなどを基に、他当時の関連記事などの文献と調査を通じて補完した。

6）村田正氏については本稿の第3章でその経歴を明らかにした。

7）生前村田正への聞き取りと、村田正の残した経歴口（(株)村田相互設計提供）による。

8）河内嘉就氏については第3章においてその経歴を明らかにした。

9）河内嘉就、「広島の建築今昔9」日刊中国建設新聞、昭和59年4月27日所収。

10）松永豈司氏は昭和23年4月暁設計事務所に参加し、当時経理を担当した。

11）沖清人氏は昭和23年4月広島県工業学校卒業直後暁設計に参加し、設備設計を担当。

12）松永豈司氏、沖清人氏へのインタビュー調査による。

13）元河内嘉就建築事務所で仕事をし、昭和41年に独立して都市建築研究所を設立。

14）鎌田亮雄、「デザインムーブメント」、『都市広島/1945―1995&TheFuture/都市デザイン50年の軌跡と新たな風景づくり』、広島市、1996年3月31日発行。に所収。

15）生前村田正によると、当時長島敏局長に出会ったのは5月の頃で、暁設計事務所は既に設立した時であったが、当時暁設計事務所のことを「暁建築工業所」、「暁設計工務店」とも呼ばれていたという。これらは松永豈司氏、沖清人氏へのインタビュー調査によっても証言されている。

16）広島世界平和記念聖堂の建設に当たられた愛宮真備神父、1948年10月25日日本に帰化。それまではフーゴ・ラサール神父。

17）生前村田正氏談。聞き取りに石丸紀興。

18）柴田実（暁部隊建技大尉）は2年位で、郷里福知山市役所の建設課長に転出した。

19）故河内嘉就氏の生前の聞き取りによる。河内氏の父親自宅は、昭和10年に、学生であった河内氏が基本設計をし、父が村田正氏に製図と管理を頼んで建てたという。そこで父と村田が懇意であったという。その父の紹介で暁に入るようになったらしい。

20）大旗正二氏談。暁設計に参加した理由については第3章3節村田正二の経歴を参照。

21）所長、村田正、岡村豈、柴田実、木村俊雄、河内嘉就、秋山(不詳)、松永豈司、沖清人（広島県工業学校卒業直後)、後福田邦彦、他2,3名といったグループだった。

22）建築家クラブというは、現在の広島県建築事務所協会の成立時の名称である。村田正氏、河内嘉就氏、大旗正二氏など7人の座談会によってその設立年代と名称が明らかになった。座談会記録は1987年(社)広島県建築士事務所協会「社団法人設立10周年記念誌」に所収。記録によると、戦後間もなく進駐軍の駐留施設の発注が始まり、設計事務所経営が広島でも成り立つ見通しがついたことから、事務所の開設が目立つようになって、設計料について協調する必要が生じ、建築設計家クラブとして昭和23年8月1日の旗上げだと記している。なお設計料の協調を主張したのは河内嘉就であったことが明らかになった。

23）河内嘉就氏によると、暁の拠点については、福屋デパートの焼ビルを、五分板で間仕切りし、電灯のみを付けた10坪位の廊下を仕切ったスペースであったという。

24）大旗正二氏本人談。

25）生前河内嘉就氏、大旗正二氏本人談。

26）大旗正二氏本人談。

27）大旗正二氏談。

28）山田守の下で最初の仕事は、東京逓信病院の原寸であるタイル創であり、最初に責任を持って設計した広島市横川のメーター検査所と、山田守の下で製図に関わった広島貯金局があると、生前河内氏は記した。

29）大旗の満鉄での経歴については大旗氏への聞き取りと、西澤泰彦「南満州鉄道株式会社の建築家―その変遷と特徴」『アジア経済』35巻7号、1994年7月、P302～314。西澤泰彦、「20世紀前半の中国東北地方における日本人の建築活動に関する研究」東京大学博士学位論文、1993年P40「表Ⅰ―2―1：1940年に満鉄の建築組織に所属した技術者（その4)」によって補完した。

30）浜口隆一「建築家・大旗正二氏のこと」／『人と建築の交りを求めて…あゆみ／大旗連合建築設計作品集』昭和47年6月15日発行。に所収。

31）大旗正二氏談。この制度の実施については西澤泰彦、「海を渡った日本人建築家/20世紀前半の中国東北地方における建築活動」彰国社1996年12月10日P181～185を参照。

32）武宮九郎、「海の幸、宮九郎作」／『人と建築の交りを求めて…あゆみ／大旗連合建築設計作品集』昭和47年6月15日発行。に所収。

33）筆者と大旗氏談。

34）建設通信新聞『建築家のパーソナリティと作品』、浜口隆一氏との対談により。

35）河内嘉就、「広島の建築今昔15」日刊中国建設新聞昭和59年5月9日号に所収。

36）生前河内嘉就への聞き取りによる。

37）当時の広島の市内は、校舎及び焼トタンぶきのバラックが、少々建っていた。このような背景の中で、ガスビルは木造ながら、タイル張りの斬新な設計で、レストランが併設され、ホールもあり戦後復活したロータリークラブの会場にも利用され、諸種の催し物に便利を供与したものであった。児童文化会館は第5章でもう少し詳細に述べているが、いずれも当時の広島においてはユニークな建物であったと言えるだろう。

38）大旗正二氏談。

39）昭和22年頃丹下健三氏は建設省の嘱託として広島に派遣され、数ヶ月滞在された。

40）生前河内氏談。

41）当時アメリカ在住の著名な彫刻家である。

42）当時の市長は渡辺市長であった。昭和26年11月市民公募により平和大通りと名づけられ、渡辺市長提唱による献木運動でグリーンベルトの植樹も進んだ。

43）河内嘉就、「広島の建築今昔15」日刊中国建設新聞昭和59年5月9日号に所収。

44）生前河内嘉就氏談。

45）河内嘉就、「30年を顧みて」／広島市建築行政協会創立30周年記念誌、『よせむね』昭和58年1月28日発行。に所収。により。

46）「広島市建築行政協会創立30周年を迎えて／会長の挨拶／会長村田正」、広島市建築行政協会創立30周年記念誌、『よせむね』昭和58年1月28日発行。に所収。

47）河内嘉就、「30年を顧みて」／広島市建築行政協会創立30周年記念誌、『よせむね』昭和58年1月28日発行。に所収。

48）昭和21年、市内の小学校教師60人によって、広島児童文化振興会が結成された。同振興会は、児童読み物『銀の鈴』を発刊し、全国誌として児童文化の振興に寄与し、次いで児童文化のセンター建設運動へと発展していった。

49）広島市役所編『新修広島市史／第四巻／文化風俗史編』(昭和33年12月27日）P673。

50）運営について、ハワード・ベルは「特筆大書すべきは、この維持費が社会全体によることであり、官僚の計画でなく、民間のそれによってなったものであることを喜ぶ。今後の運営については、まず教育・児童問題に精通したものがあたるべきで、官僚は好ましくない。維持費の寄附は財の比例により、県下一円にわたってとるべきで、県・市が独善的な割当てをしてはいけない」（広島市被爆50年記念史編修研究会、「被爆50周年 図説戦後広島市史／街と暮らしの50周年」広島市総務局公文書館発行、平成8年3月31日、P253）と述べているように、この会館は、占領軍の教育・文化政策の理念にそった施設ではあったが、現実には期待していた外国からの援助もなく、その運営はまず資金面で行きづまった。建設費が支払えず、建物はこれを施工した建設会社の所有のままであったり、毎月の運営費は赤字つづきで、発足当初から苦境に陥った。県内の小・中学生から募金を募ったり、教組に救援を依頼したりして苦心と努力を重ねたにもかかわらず、民間施設としては維持することができず、ついに昭和25年には市が買収して公営の施設となった。この施設は、昭和39年、県立屋内プールが建設されるのにともなって姿を消した。もともと旭兵器株式会社地鎮前工場の建物を譲り受けたもので、この時すでに老朽化が進み、昭和30年には、これに代わる施設として、広島市公会堂が開館していた。

51）清水建設株式会社広島支店編『礎／30年のあゆみ」昭和50年7月発行。

52）広島市役所編『新修広島市史／第四巻／文化風俗史編』(昭和33年12月27日）P673。

53）河内嘉就、「広島の建築今昔15」日刊中国建設新聞昭和59年5月9日号に所収。

54）築地小劇場は大正6年東京の、小山内薫、土方与志らが設立が、当時舞台奥にクッペルホリゾントを備えた新劇のための最初の劇場舞台間口六間。当時のヨーロッパ諸劇場の先端の燃料を採用、定員は400人であった。昭和元年築地小劇場は改築され、定員500人、客席は階段式ワンフロアであった。

55）藤森照信は「戦前の日本の建築界は世界に比べデザインや思想ではそうひけはとらなかったが、高く大きくの二大テーマについては著しく遅れていて、まるで勝負にならなかった。例えば高さについては…また大空間にいたっては、そうしたものが建築デザイナーの課題だなんてだれも考えなかった。この二つの遅れをどう克服するかは、戦後の日本の建築界の大きな仕事になった。」として戦後の高層、大空間建築と建築家の課題を述べている。柏木博、藤森照信、布野修司、松山巌著『建築作家の時代』株式会社リブポート1987年8月25日P159。

56）広島市被爆50年記念史編修研究会、「被爆50周年 図説戦後広島市史／街と暮らしの50周年」広島市総務局公文書館発行、平成8年3月31日、P253による。

57）故河内嘉就氏談、昭和59年5月8日。

58）広島市被爆50年記念史編修研究会、「被爆50周年 図説戦後広島市史／街と暮らしの50周年」広島市総務局公文書館発行、平成8年3月31日、P253による。

59）『朝日新聞』昭和23年5月4日号。

60）農協ビルは34年間の歴史的な使命を完成し、昭和59年に取り壊され再建した。

61）市役所は昭和3年3月に建築家増田清の設計によって建てられた。昭和20年被爆を受けたが被災が少ない。その建物については石丸紀興、李明「建築家増田清の経歴と広島における建築活動について」日本建築学会計画系論文集第525号P327～3341999年11月号で検討されている。

62）平成11年2月15日大旗正二氏へのヒアリング調査による。

63）昭和23年の農協ビルを建てる時には、セメントの準備が出来てから、鉄筋は呉からもらうようになったが、鉄を運んできて、鉄筋を自分でつくるようになった。と大旗正二氏は復興建築の材料の困難さを語っている。

64）建設通信新聞『建築家のパーソナリティと作品』浜口隆一氏との対談／『人と建築の交りを求めて…あゆみ／大旗連合建築設計作品集』昭和47年6月15日発行。に所収。

65）従来の市街地建築物法の基本的改正により成立したもの、目的建築物の質的向上により建築物の安全強化と都市環境の整備を図るため。

66）建築技術者の技術能力を検定して、その資質を確保するため、建築物の設計工事管理を行う技術者の資格を定めて、その業務の適正化を図る。

67）これまで昭和29年の竣工であると伝えられてきたが、今回調査を行い、施工者の清水建設広島支店の資料によると工期は昭和26年4月～昭和26年12月となっている。本稿はそれに従う。

68）清水建設株式会社広島支店編『礎／30年のあゆみ」昭和50年7月発行。

69）河内嘉就「ひろしまの建築今昔」／「日刊中国建設新聞」昭和59年5月10日版掲載。

70）当時西村好時建築設計事務所の設計として第一銀行広島支店（昭和29年竣工)、山下寿郎建築設計事務所の設計として日本興行銀行広島支店（昭和29年竣工)、石本喜久治の広島市立浅野図書館など、その外清水建設、日建設計などの活動が活発的に行っていた。

写真図出典：写真1は広島公文書館提供。写真2、3、4は広島県建築士事務所協会提供。

（2000年2月10日原稿受理，2000年6月19日採用決定）



NII-Electronic Library Service